

〈喜多流〉

# 中尊寺 薪能

たきぎ のう

一六・三〇

祭 儀 白山神社宮司

火入之儀 薪能奉行

舞囃子 春日龍神 金子 敬一郎

太鼓 小寺真佐人 佐藤寛泰  
 大鼓 亀井洋佑 友枝真也  
 小鼓 森 貴史 地謡 内田成信  
 笛 一噌隆之 塩津圭介

和泉流

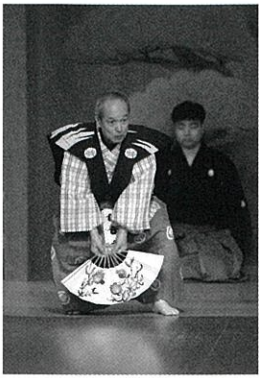
狂言 文 荷 野村 万作 石田 幸雄

アト・主 シテ・太郎冠者 アド・次郎冠者

後見 破石澄元

(休憩)

一七・四五



写真「文荷」 万作の会 提供

能 忠 度 宝生常三 梅村昌功

後シテ・平忠度の霊 前シテ・老人 佐々木多門

ワキ・旅僧 館田善博  
 ワキツレ・従僧 梅村昌功  
 アイ・須磨の浦人 野村裕基

大鼓 亀井洋佑 一噌隆之  
 小鼓 森 貴史 笛  
 後見 塩津哲生 佐藤寛泰 友枝雄人  
 中村邦生 地謡 友枝真也 長島 茂  
 大島輝久 出雲康雅  
 塩津圭介 狩野了一

終演予定 一九・二五頃

本公演はガイドラインを踏まえ対策を施しております。

ご来場を戴く皆様へのお願い

\*飲食や大声の会話はお控え願います。

\*マスクの着用と手指消毒を願います。

\*体調のすぐれぬ方はお控え願います。

## 舞囃子「春日龍神」

明恵上人は海を渡り遙かなる天竺(インド)までの旅を志す。上人の渡天を断念させ日本に引き留めようと仏法の守護神である八大龍王が大地を震動させて豪快に出現。眷属を引き連れて釈迦一代の諸相をことごとく示す。雄大に躍動する龍神の舞を、舞囃子の演式にてご覧いただきます。

## 狂言「文荷」

太郎冠者と次郎冠者は、主人から少人(稚児)に宛てた恋文を届けるよう命じられる。二人は道々文を押し付け合うが、なかなか進まないのので文を竹竿に結び二人で担ぐことにする。能「恋重荷」の一節を謡いながら運んでいくと、何故か文が重く感じられる。どうしても中身が気になると、二人は文を開けてしまふ。

## 能「忠度」

藤原俊成の亡きあと、仕えた家人が出家して西国行脚へと旅立つ。須磨の浦に立ち寄ると磯辺に一本の桜が咲いている。これこそ有名な「若木の桜」であるかと眺めているところへ、塩を焼くための薪を運ぶ老漁夫と出会う。日が暮れて僧が一夜の宿を頼むと、老人は「この桜陰こそ『行き暮れてこの下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし』と辞世の歌を詠んだ平忠度の墓標でありますよ」と答え応じて、山から浜へ通う折ごとに自分もここへ花を手向けているのだと述べ、僧に忠度への回向を頼んで姿を消してしまう。

夜となり、桜の下で僧が旅寝をしていると、忠度の霊がありし日の姿であられる。平家一門が朝敵の身であったために、俊成が編纂した勅撰集「千載集」に自詠歌が「詠み人知らず」と記された無念の妄執を告白する。さらに、一門都落ちの際に引き返して俊成に歌を託したことや、一ノ谷の合戦において岡部六弥太との奮闘の末に最期を迎えたありさまを物語ってみせる。箆の矢に残した短冊の「行き暮れて」の歌を高らかに詠じ、回向を僧に頼んで、忠度の霊は花の下へとまた帰ってゆくのであった。

文武両道に優れた薩摩守忠度。和歌への執心を中心に据えて、花鳥風月のはなやかな趣きを、平家の公達にたくして作り成した世阿弥の名作。

表「忠度」使用写真 佐々木多門 所演